

事例 1 東京大学

既存の同窓会を全学卒業生ネットワークに一元化



1877(明治10)年、日本で最初の大学として産声をあげた東京大学。1949(昭和24)年に新制大学として生まれ変わり、国立大学の法人化に伴い、2004(平成16)年を「第三の創業」と位置づけ、再スタートを切った。

「法人化とは、いろいろな意味で、大学を社会のなかにもう一度位置づけ直すことであると私どもは考えています。その際、社会と大学とを結ぶパイプ役として、やはり卒業生が一番頼りになる。社会の流れがよくわかっていて、社会からのさまざまな要望を大学へ伝えてくれる存在ですから」

古田元夫理事(副学長)は、東京大学が「卒業生」に注目し始めた理由をこのように語った。旧来は、卒業生との関係が強い大学であるとは、お世辞にも言えない状況であったという。

たとえば中央官庁の中に、「東大卒業生の会」といったものがあると、学閥問題もあるため、同窓会をつくる動きを抑制してきたことも理由の1つに挙げられる。同窓会の連合会組織の歴史も、日本初の大学にしてはきわめて新しい(東京大学同窓会連合会は1997年結成)。このように同窓会活動が活発でなかったということは、すなわち、大学と卒業生との関係性が希薄だったことの証といっていられる。

しかし時代は変わった。法人化を契機に、東大でも同窓会の全学的な組織化が不可欠となった。そこで2004年10月、学部や学年、クラス、運動会、サークル、地域等々に散在する同窓会を包摂しつつ、大学として卒業生ネットワークを広げていくという趣旨で、「学友会」(図1)をスタートさせた。同時に、それに対応する大学側の組織として、総長直轄の機関である「卒業生室」を立ち上げた。

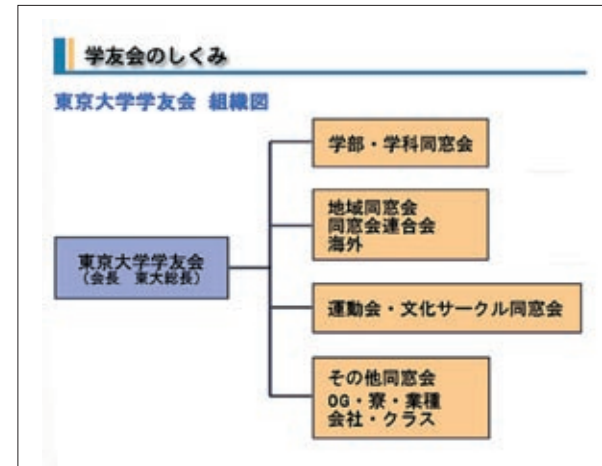


東京大学 古田元夫理事

全学レベルの卒業生名簿を構築中

卒業生室のミッションはいくつかあるが、もっとも明確な使命は、全学レベルの卒業生名簿を、電子化ベースで作成することである。そのために、新制以降の学籍簿の入力を開始した。同時に学友会側も並行して、学部ごとや運動会・サークル等、バラバラで存在する既存の同窓会の協力を得て、各同窓会の名簿をもとに、各人の現時点のデータも入力した。こうして現在、約40%の卒業生の連絡先を把握できるようになった。また、これまでは各部署ごとに問

図1 学友会組織図



い合わせなければならなかった卒業生認証が、データベースへアクセスすることで解決できるようになったという(図2)。

データベースの整備はされたものの、大学と同窓会とのつながりは今後も継続していきたい。そのために卒業生室は、学友会に登録している同窓会に対して手厚いサービスを提供し始めた。そのひとつが「名簿管理サービス」だ(図3)。これまでは各同窓会の事務局長が個人のパソコンや帳簿上で行っていた名簿管理について、東京大学が開発したシステムを各同窓会に開放するのである。名簿の登録や更新、情報配信などの作業に加え、昨今は個人

図2 卒業生名簿のデータベース化のしくみ

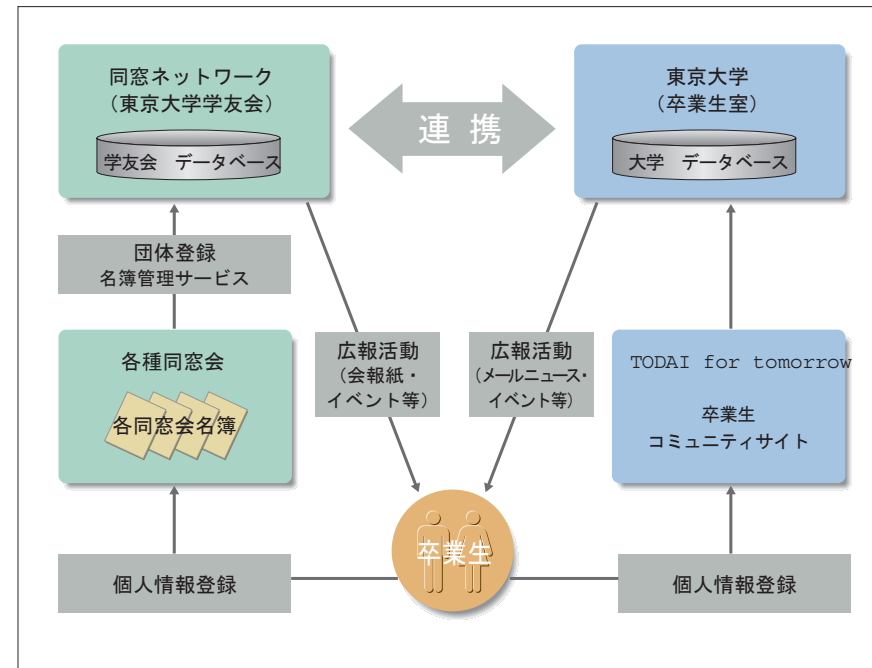


図3 名簿管理サービスの機能

「名簿管理サービス」が同窓会団体の名簿管理業務をサポートします

- 【機能】 事務局長の個人パソコンで会員の名簿を管理するのはセキュリティ面から心配

▶ 大切な個人情報を守るセキュアな環境
大企業の人事部門も多く採用している個人情報管理専門のシステムが会員の個人情報を守ります。
- 【機能】 名簿管理用の機能が網羅されたアプリケーション導入を考えている

▶ シンプルな管理画面に名簿管理の基本機能を搭載
登録、検索、更新、ダウンロード、印刷といった名簿管理の基本機能を搭載。管理画面も、どなたにもわかりやすい、シンプルな構成です。
- 【機能】 様々な対象に一斉メールを配信したい/対象毎のメッセージリスト機能は大変だ

▶ 条件を絞り込み、メールを一斉配信
条件を設定し対象を絞り込んだ上で、一斉メールを配信することができます。メールの末尾に広告文書が挿入されることはありません。住所ラベル用にデータをダウンロードすることも可能です(CSV形式)。
- 【機能】 自分の会社でなければ名簿管理ができない/他の管理者と業務分担ができない

▶ オンライン環境があれば、どこからでもデータベースにアクセス可能
インターネット経由でデータベースにアクセスが可能ですので、名簿管理業務に当たり慣れを選びません。原則一団体が名簿管理を決定できますので他の管理者とのデータ共有も可能です。
- 【機能】 住所等の更新を個別に事務局が対応するのは手間だ

▶ 会員本人が個人情報を更新
卒業生限定オンラインコミュニティ「TODAI for tomorrow」(以下「TTF」と表記いたします)上の連携機能を活用すれば、会員本人が直接個人情報更新ができます。

情報保護に対するセキュリティ上の注意も必要である。そうした煩雑な名簿管理業務を、東京大学学友会に登録した団体に限り、無料で利用できるようにした。

「同窓会の一人ひとりの会員にアプローチすることも必要ですが、それよりもまずは各同窓会の事務局長の方々に大学のファンになっていただくことが重要であると考えています。たとえばみなさん、名簿管理でご苦労されていますから、その業務を大学が代行してさしあげる。あるいは同窓会ホームページのホスティングサービスを提供する。大学が事務局長の方々と良好な関係を築ければ、会

員のみならずともいま以上にコンタクトが増えていこうと思っています」(東京大学卒業生室 小野寺達也氏)

そうは言いつつも、卒業生一人ひとりに対するアプローチを目的としたインフラづくりも着々と進行している。2006年7月、東京大学のWebサイト内に卒業生限定のオンラインコミュニティサイト「TODAI for tomorrow」をオープンした(図4)。利用方法としては、まずは卒業生が「登録申請」から入り、氏名や卒業年度などを入力。大学はデータベースで照会を行い、卒業生であることを確認したうえで利用を許可。

図4 TODAI for tomorrow



卒業生コミュニティサイト「TODAI for tomorrow」のログイン画面(上)。ログイン後、卒業生検索などを行うことができる(下)。

こうして登録を済ませた卒業生は、東大オリジナルパーマネントアドレスを取得できたり、オンライン上で卒業生の検索ができるようになる。また、小宮山宏総長宛にメッセージを投稿することも可能だ。現時点の利用者は、20代～40代の卒業生を中心に数千人規模。新制以降でもおよそ20万人といわれる東京大学の卒業生数からすれば、開拓すべきマーケットはまだ広い。

「現在の『TODAI for tomorrow』は大学と卒業生とが一对一でコンタクトを取り合うという段階です。今後は卒業生間の横のコミュニケーションが活発になるようなしくみを徐々に用意していき、広い意味でのソーシャルネットワークをめざしたいと考えています。そうしたなかで、利用者数がもう一桁増えることを当面の課題としています」(小野寺氏)

卒業生が自発的に関わる学生支援プロジェクト

もちろんバーチャルな空間だけでなく、リアルな世界でも卒業生たちと接触する機会を増やしている。

「ホームカミングデイ」は2002年から毎年行われるように

なり、昨年第5回が開催された。

「東京大学の良き理解者であり、良き伝播者となり得る卒業生のみなさんに、大学がいま行っていることや、考えていることをお伝えすること。それが現在のホームカミングデイの第一の目的です。そして今年からは、その企画や運営について卒業生にもっと幅広く関わっていただき、卒業生のみなさんとともにホームカミングデイを盛り上げていきたいと考えています」(小野寺氏)

昨年開催された第5回ホームカミングデイは、小宮山総長のあいさつに始まり、創立130周年記念事業の開始宣言がなされたり、古田理事が卒業生ネットワークの意義を説いたり、先進的な研究者によるフォーラムやパネルセッションが開催されるなど、東京大学の現在と未来があらゆる角度から示される、狙い通りのものであったという。さらに今年は企画等においてより卒業生の視点が加わることで、いっそう多くの卒業生の来場が期待されている。

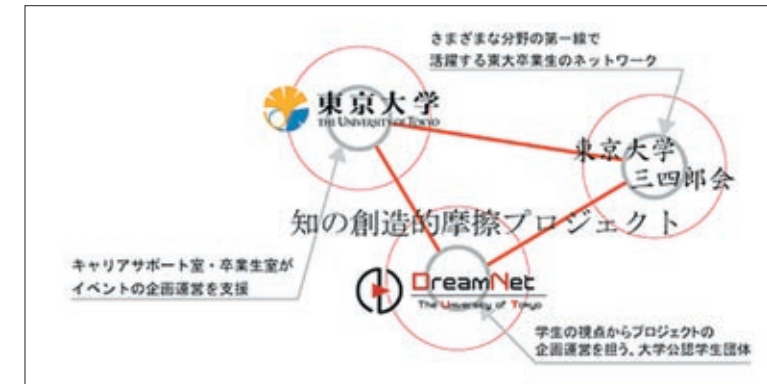
卒業生と在学生とが交流をはかる場もある。「知の創造的摩擦プロジェクト」は、学生の主体的なキャリア選択を支援する試みとして2005年よりスタートした。

このプロジェクトには三者が関わっている(図5)。まずは在学生で、「東大ドリームネット」という大学公認団体がこのプロジェクトの企画運営を担っている。卒業生側は「東京大学三四郎会」という同窓会で、名前の通り30代～40代中心の社会の第一線で活躍するOBたちがメンバーだ。そして大学側は、キャリアサポート室と卒業生室が側面から活動を支援するという体制だ。

「知の創造的摩擦プロジェクト」の交流会は毎回大盛況だという。イスがずらりと並べられただけの大教室に500名を超える学生と卒業生が集い、膝を突き合わせ、就職や仕事の実際、職業観や人生観といったものを長時間にわたり熱く語り合う。世代間という「縦の摩擦」、業種や専門間という「横の摩擦」が互いの刺激となり、それがひいては学生たちの意思決定に好影響をもたらすであろうことを当初から目論んだプロジェクトだ。これが学生にとって得がたい機会であることは容易に想像できる。しかし卒業生にとっても、この体験はとても貴重なもののように。

「弁当ひとつ出るわけではありませんが、みなさん本当に喜んで帰られますね。というのも、かたちとしては異業種

図5 知の創造的摩擦プロジェクト



交流会のようなものではありませんが、そこに学生がいるというシチュエーションが社会人にとってはとても新鮮に映るようです。社会人同士のような駆け引きはなく、適度な受け答えをするわけにもいかず、その場では本当に真摯なやりとりが展開されているのです」(小野寺氏)

熱心な参加者が、いずれは大学の支援者に

そもそもこのプロジェクトは、卒業生から持ち込まれた企画だという。東京大学の新しい動きに共鳴した卒業生が、「ならば在学生のキャリアディベロップメントのために、卒業生をネットワーク化したらどうだろうか」と大学側に持ちかけてきた。その提案者たちが、現在も「東京大学三四郎会」の中心メンバーとして「知の創造的摩擦プロジェクト」などで活躍しているという。

卒業生のそうした自発的な動きは、まさに卒業生室が、そして東京大学が待ち望んでいたことだった。

「要するに、大学づくりに卒業生を巻き込みたい。われわ



知の創造的摩擦プロジェクトの交流会は、学生が卒業生と直接語り合える貴重な場だ。

れの究極の目的はそこにあるのです」(古田理事)

東京大学が変わろうとしていることに関心を持ち、それをおもしろいと感じた卒業生が意見をぶつけてくる。大学は意見を聞くばかりではなく、その意見を実行に移せるような場やインフラを提供する。彼らが思い思いのプランを実現することで、大学に新たな知や刺激がもたらされる——。そうしたことが次々に現実となるしくみをつくり上げることができれば、卒

業生との協力関係は恒常的になり、大学改革は一層進むであろうと古田理事は言う。

無論、寄付への期待もある。運営費交付金の減額を考慮すると、毎年20億円規模の安定的財源は確保していきたい。しかしそのことと、卒業生ネットワークとは、いまはまだ別次元の問題として考えているという。

「新しい東京大学をつくることに卒業生がおもしろがって参加できるような雰囲気ができあがれば、寄付もおのずと集まってくるのではないかと考えています」(古田理事)

とはいえ、その道のりが容易でないことは重々承知している。さまざまな活動を始めているが、かならずしもうまくいっているものばかりではない。

「当初から予想されたことではありますが、なかなか根気が要る仕事であることは確かです。そもそも同窓会というものは大学が旗を振ればすぐになびいてくれるといった類のものではなく、『あの集まりに行ったら、あいつに会えるかも』といったレベルの期待感がうまく積み重なって

いけないことには発展しないという面があるようです。その意味では一歩一歩進んでいくしかない。東京大学にとっては、ある意味で新しい伝統をつくる事業ですから、そんなに簡単に伝統が生まれるわけではないのです。だからもうしばらくは、産みの苦しみが続いていくでしょう」(古田理事)

(注1) 文中の図1、図3～5は東京大学HPより引用。
(注2) 本取材は2007年3月に行ったもので、4月1日より平尾公彦副学長が卒業生担当役員として就任されています。